

山の百の花

滝尾 村田 浩子

【43】セツブンソウ

スプリング・エフェメラルという言葉がある。春の短い命という意味で、春浅い頃、落葉広葉樹林の林床に葉を出すと、すぐに花を咲かせて初夏にはあわただしく地上から姿を消す短命な多年草のことをいう。セツブンソウやカタクリはその代表である。

丈が低く、いかにも弱々しそうなこの花たちは、木々が葉を茂らせて日光を遮るようになる前に光合成によって栄養を蓄え、エネルギーを温存するためにすぐに葉を枯らして休眠する。時々スマイレやオオミスミソウ（雪割草）などをスプリング・エフェメラルとしているのを見ることがあるが、秋まで葉が残るこれらの植物はスプリング・エフェメラルではないという。

セツブンソウは関東以西に分布し、東京の平地ではちょうど節分の頃、10センチほどの花茎に直径2センチ位の白い可憐な花をつける。白い花びらのように見えるのは萼片で、黄色い雄しべのように見えるのが本当の花弁であるらしい。

石灰岩地を好むために生育地は比較的限られるが、秩父四阿屋山のつつじ新道の入口付近、堂上バス停脇の群生地は有名で、車道に面した落葉樹林の下に、紙吹雪を散らしたように群生するのを何回か見たことがある。地元の両神村ではこの花が咲く三月初旬にセツブンソウ祭りを催して、観光客に甘酒などをふるまう。山地では節分より一ヶ月ほど遅く咲くようである。



村田

【44】カタクリ

低山に咲く花の中で、万葉の昔からスミレと並んでこれほど多くの人に愛されてきた花も少ないのではないかと思う。山の北斜面に群生することが多いので、春になると、どこかでその群生に会いたい気持ち誘われて山にでかけることが多い。

カタクリは落葉広葉樹林が芽吹く前の明るい林床に、向き合った二枚の葉を広げて、20センチほどの花茎に淡い紅紫色の花を一個だけつける。花は下向きに咲くが、花びらは高く反り返り、くるくると舞うバレリーナのコスチュームを思わせる。

山国の人は花の盛りにこの葉を摘んで茹でて食べたというが、花が終わるとまもなくこの葉は枯れて姿を消す。そのかわり地下の小さな鱗茎に栄養が蓄えられ、昔はこの鱗茎からデンプンを取り出して片栗粉として食用にした。馬鈴薯からデンプンをとるようになった今も、片栗粉という名前だけが残っているというのもおもしろい。

それはさておき植物生態学者によると、カタクリやセツブンソウなどスプリング・エフェメラルの花々が早春に美しく装って群生するのは、日光をふんだんに浴びたいためだけではないらしい。木々が葉を茂らせはじめると、虫たちの目につきにくくなって花粉を運んでもらえなくなるので、その前に精一杯着飾って群生し、多勢をたのんで虫たちを誘っているのだと聞くと、植物の賢さに脱帽するほかはない。